
I S 過去より受け継がれし霊石 (いし)

IZUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 過去より受け継がれしいし霊石

【Nコード】

N1182Y

【作者名】

IZUMI

【あらすじ】

親の職場に社会見学、そこまではよかったが事故を引き起こししまった。

作者が不器用なのでどうなるかわかりません。どうか暖かい目で見てください。

プロローグ：非日常への憧れ（前書き）

お手柔らかにお願いします。

プロローグ：非日常への憧れ

IS

正式名称『インフィニット・ストラトス』こいつは宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ。

しかし『制作者』の意図とは異なり、宇宙進出は一向に進まず、結果としてはこのスペックを持って余した機械は『兵器』と変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた 飛行パワードスーツ

それは中学三年の夏休みに起きた。

その時俺は、一人で両親の勤め先であったとあるIS関連企業に社会見学という形で来ていた。

親の仕事を知ることには悪いことではない。社会見学だからと大人達は快く受け入れてくれた。

見学には広報の人が付いてくれた。ISの構造や製造行程などを説明してくれた。最後には純国産のISである『打鉄』を見ることが出来た。

「あの、これ触っていいですか？」

「ええ、それにしても残念ね、そんなにISの事が好きなのに操縦が出来ないなんて」

「いいんですよ、動かせなくても武器の設計や本体の設計は出来ますから」

ちなみにだが、このISという機械、重大な欠点がある。

「君が男の子じゃなければ動かせるのにね」

そういうことだ、簡単に言うと女性にしか使えない。

俺は男だから触れても何の反応もしない。このまま一生こいつらに関わることは無い可能性もある。そう思いながら触れた。

簡潔に言おう起動させちまったのだ。男であるはずの俺が。それと同時に胸元が一瞬光り輝いた。

当たり前のように捕縛。政府の力で自宅軟禁状態を余儀なくされた。しかし俺はそんなことよりもっと別のものの事で頭がいっぱいになっていた。

(なぜあんな所で光ったんだ?)

俺は常に持っているものがある。葬式の際に祖母ちゃんから貰った祖父ちゃんのペンダントだ。

そのペンダントトップは、シルバーの網の中に5cm程のクリスタルが入ってるようなデザインだ。

それをくれるときに祖母ちゃんから言われたことを思い出した。

『お前さんにこれをやるう。祖父さんの形見だから大事にするんだよ。』

ここまでは、普通だった。

『これが光ったときは、触っていた武器が、これからお前さんの運命の武器になるだろうね。』

何を言ってるの?まだ葬式中なのに。

『もしものときだよ。もしもそのようなことがあれば、それを離してはダメだよ。』

再び両親の職場。

今回は、俺の隣には両親。政府のお偉いさん方も揃っている。

クリスタルの話しを両親にした。祖母ちゃんも入ってくれた。

そいつが必要なんだ。っと一言。流石に信じてはくれなかったが、もう一度会うことを許してくれた。

目の前には以前と同じようにそいつがいる。

「久しぶりだな。前の事が本当ならもう一度見せ付けてくれよ。」

再び光りに包まれた。

男が二人だけ？ Part 1（前書き）

原作どおりにある程度進めたいと思っています。

男が二人だけ？ Part 1

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑んでいる女性教師は、山田真耶先生。副担任だそうだ。(さっき自己紹介をしてくれた。)

身長は目測であるが少し低いようだ。だいたい生徒と変わりが無い程度に。それにしても服がダボツとしているし、かけている黒縁メガネもやや大きめのようで、若干ズレている。

全体的に言くと、『大人ものを無理して身につけた子供』的な不自然さがある。そこは、もう気にしないでおこう。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」
異様な緊張感が漂う教室に、彼女の一言は消えていった。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
ちよつとうるたえている副担任が可愛そうだから少しくらい反応をしてあげたいが、そこまでの余裕が無い。
なぜか。

教室の中に男子は二人しかいない。後は女子なのだから。

今日は高校の入学式。新しい門出であり、むしろ喜ばしい日だ。

問題は、男が俺以外に男子は一人しかいないことだ。

(きつい、きつすぎる。)

自信過剰と思われたくないのだがほぼ全員からの視線を感じる。

彼とは席が若干離れている。彼からすると窓側斜め後方となるわけだが。それだからか、前方の生徒がたまに見てきたりする。とても

しんどい。

目の前の席に、視線を持って行く。

「……………」

薄情な元居候の篠ノ之箒は、窓の外を見ている。約二年ぶりの再開なのだが、嫌われたか？斜め前の彼もすぎるように箒を見ていた。知り合いか。

「……………織斑くん、織斑一夏くん。」

「は、はい。」

すっかり忘れていたが、自己紹介の途中だった。

織斑一夏、俺以外の唯一の男だ。

後ろを振り返り、

「えー……………えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

その言葉の後、儀礼的に頭を下げた。それでいいだろうと思っただが、周囲の連中がそれを許さないようだ。

それは、この直後の俺を案じているようだった。

彼はこのまま動きそうもないから、回想の続きといこうか。

結局、俺はお偉いさん方の前で歩き回ったり空中停止などをやっけていつの間にか、フォーマット初期化と最適化をいつの間にか終わらされて打鉄にベルト状のモノが出来ていてバツクルに形見のあの石が、埋め込まれて入れ込まれたになってしまった。

自分の専用機を持ってしまったわけ、再び捕縛というか本格的に軟禁となってしまうた。

時は進み二月。有り難いことに織斑一夏が受験会場で動かしてくれた事で彼の報道を各社ビックニュースとした。そのおかげでゆっくりとすることが出来た。

「以上です」

多分考えたが何も出なかつたのだろう。

がたたつ。思わずずっこけた女子が何人かいた。俺は正解だと思っ特にいい事ななければ。

パアンツ！いつの間にか彼の後方に黒のスーツにタイトスカートで

すらりと背の高い女性教員がいた。

「げえっ、関羽!？」

パアンツ!また叩かれている。それにしても叩かれすぎではないか?

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーンの低めの声。目つきも鋭い。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてしまったてすまなかつたな」

彼への対応とは一変優しい声になった。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

先ほどの涙声はどこへやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと応えている。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者にはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんと!自己紹介で恐怖政治発言!

しかし、周囲の女子からは困惑した俺と異なり黄色い声援が響いた。

「キャ !千冬様、本物の千冬様よ!」

「ずっとファンでした。」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです!北九州から!」

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですよ!」

「私、お姉様のためなら死ねます!」

きゃいきゃいと騒ぐ女子達を、織斑先生はうつとうしそうな顔で見ている。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。それとも何か?私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか?」

織斑千冬。彼女は第一世代型ISの操縦者であり、第一回IS世界大会にて総合優勝および格闘部門優勝の結果を残している。そこから

にいる女子が慕うわけだ。

しかし、いつの間にか引退してしまった。そこまで競技のほうには興味が無いから知らないが。

「きゃあああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして！」

ちなみにだが、彼女は「ブリュンヒルデ」と呼ばれている。モンド・グロツソで総合優勝したからだそうだ。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

「パアンツ！本日三度目。よく叩くねこの人は。」

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

そういうことなのだろう。つまり

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」
そう言うことであろう。

「それじゃあ、男で『IS』を使えるのも、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

最後のを聞かなかつた事にして、改めて言うておく。

俺達二人は今、世界で二人だけの『IS』を使える男としてここ、公立IS学園にいる。

IS学園とは、IS運用協定に基づいたIS操縦者を育成する教育機関だ。ここの資金源はすべて日本国が持つことになっている。そしてこの施設にかかわる問題や事故は協定に参加している国に説明がしつかり出来るように日本国は公平に介入しなければならない。その割には学園内にて得られた技術は、協定に参加している国に公開しなければならない。それらの国の国籍を持っている人は、無条件に入学の機会を与えることや、それらの人の日本での生活を保証しなければならない。

ひど過ぎやしないか日本への対応が。

まあ、今この一国民で特に力もない少年が、なんやかんやいつても世界が変わるわけがないが……。

しかし、俺には少し気になることがある。俺はIS関連施設で、織斑はIS学園の試験会場で、ISを動かしたからここにいるわけなのだが。俺は仕方がないかもだけど、一夏は何でそんな所にいたんだ？後で聞いておくか。

「……くん。玉森海瑠くん」

「は、はい」

やばい、まだ自己紹介してない。

「全くここにいる男どもは、ぼつとしてるな」

織斑先生からは、ため息混じりの呆れたような声が出てきた。

「はい、すみません。すう。玉森海瑠です。これからよろしくお願
いします。」

儀礼的に頭を下げ上げて座る。織斑のように物足りないような視線を受けたが、無視した。

残りの自己紹介も終え、SHRも終わった。他の人の自己紹介か？自分の事でいっぱいでは耳に入らなかったよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1182y/>

I S 過去より受け継がれし霊石（いし）

2011年11月7日08時10分発行